



伝統を守る男達～大凧～ 若者

稲庭知裕 17歳

子供の頃から大凧を揚げるのが夢だった。父も祖父も近所の男の人たちはみんな法被を着て勇ましく綱を引っ張り、大凧を揚げる。出店があり、親戚の人も集まって、大空に凧が揚がるのを楽しみにしているまちの人がたくさんいる。中学3年生の時、父に凧を手伝えと言われて。友達は一人も行ってない。恥ずかしい気持ちと、やってみたい気持ちが交錯した。渋々、凧事務所の作業場へ行ってみた。子供の頃から顔見知りの方が何人もいた。みんな笑顔で僕を迎え入れてくれた。糸のつけ方を習い、土手に法被を着て立った。生まれて初めて、組の一員として綱を引いた。嬉しかった。大人の仲間入りができた気がした。

こんな風に大人と過ごす経験は、意外と楽しい。家族以外に触れ合う社会人デビューである。いろいろな人と知り合いになれるし、話が面白い。そして、みんな僕を一人の人として認めてくれる。今は高校3年生になったけど、組で僕は一番若い。大人のみんなは一年に一回、凧を揚げるのを楽しみにしているだけでなく、伝統を守り続けている。これから進学して中之島を離れることになる。でも地元に戻る日がきたら、また、伝統を守る凧組の男として、大凧を揚げたい。

伝統を守る男達～大凧～ 組長

原田健司 42歳

春が来る頃から大凧の絵描きは始まる。毎日毎晩、集まれる者が武者絵を描く。凧合戦は6月の第一週の土日月。地元では節句という。男たちは居ても立ってもいられない程、なぜか凧揚げに心が駆り立てられる。350年の伝統を誇る中之島と今町の凧合戦。長い歴史である。ただ毎年続けるためには仲間の高齢化と新人組員の不足が問題である。

そんな時に中学三年生の仲間がやってきた。年寄り連中は大喜び。可愛がる、いじる、教えたがる。とにかく嬉しいのだ。きっとこんな形で若者が飛び込んできてくれるから続いてきたはず。地元を離れ、久しぶりに帰郷した時、みんなが「よく来た。」と喜んでくれた。俺たちが今できる次世代への愛情や凧揚げのコツをつないでいきたい。そして、この出会いが地元のつながりを作り、水害や地震の時も近所で助け合ってきたのだ。

俺たちはこれからも仲間と子供たちと共に、伝統を守り続ける。そして、ふるさとの空に大凧を揚げ続けたい。

Ⅱ 市民協働 story Ⅱ

中之島地域は昔から、刈谷田川の氾濫に苦しんできました。土手を踏み固める意味もある大凧合戦を住民の力で運営しています。ボランティアできる者が絵を描き、合戦の一週間前からは地域住民の農作業小屋を提供してもらい、合戦当日に向けて近所のボランティア住民がさらに集まって大凧に糸をつけます。直接手伝えない住民は合戦の費用や懸賞金のための寄付をし、当日の賄を作って協力したりします。様々な人の力で凧合戦は行われ、長い伝統を刻んでいます。そこには、次世代へ凧をつなぐ思いと、世代を超えてつながる地域の営みと絆が存在します。過去、現代、未来をつなぐ大切な地元行事です。各地域には様々な地元の伝統行事があるに違いありません。その背景を改めて見直すことで協働の形が浮き彫りになり、大切さが理解できると思います。そこから生まれる新たな交流と人材がまちづくりにとって欠かせないパワーです。

